

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：32636

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720188

研究課題名(和文) アメリカ初期映画におけるリアリティの創出 ドキュメンタリー表現の黎明

研究課題名(英文) Intersection of Documentary and Fiction in the Early American Films

研究代表者

中垣 恒太郎 (Nakagaki, Kotaro)

大東文化大学・経済学部・准教授

研究者番号：80350396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカ初期映画において「ドキュメンタリー」とされるジャンルがいかにしてリアリティを創出し、形成・発展されてきたのかを探る。世紀転換期は異文化に対する異国情緒としての強い関心が窺えると同時に、ナショナリズム、国家意識に対する意識の高まりも示されていた。映画技術を含むテクノロジーの変革期であり、アメリカが国力を増していく只中であり、新旧の価値観が混在する混沌の時代に相当する世紀転換期の中で、20世紀アメリカ大衆文化のエッセンスがどのようにして生成していったのか。同時代の時代思潮・光景を映像表現を用いていかに「記録」することができたのか。その手法とイデオロギーの問題にまつわる考察を試みた。

研究成果の概要(英文)：This project explored how documentary and fictional works are making in the early stage of American film history. Even in fictional works, real incidents are often introduced, but not enough to be considered nonfiction works. This tendency shows the intersection of documentary and fiction before establishing genres. This project uses a combination of film studies and American cultural history to analyze some ideologies in terms of cultural politics and representations of nationalism, exoticism, sexuality, race, or class.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：アメリカ初期映画 ドキュメンタリー(記録映画) リアリティ テクノロジー メディア 災害表象
映像人類学 世紀転換期

1. 研究開始当初の背景

アメリカ初期映画において「ドキュメンタリー」とされるジャンルがいかんしてリアリティを創出し、形成・発展されてきたのかを探る。世紀転換期は異文化に対する異国情緒としての強い関心が窺えると同時に、ナショナリズム、国家意識に対する意識の高まりも示されていた。映画技術を含むテクノロジーの変革期であり、アメリカが国力を増していく只中であり、新旧の価値観が混在する混沌の時代に相当する世紀転換期の中で、20世紀アメリカ大衆文化のエッセンスがどのようにして生成していったのか。同時代の時代思潮・光景を映像表現を用いていかに「記録」することができたのか。その手法と異国情緒などのイデオロギーの問題にまつわる考察を試みる。

2. 研究の目的

応募者はこれまでに本科学研究費補助金による研究課題「若手研究(B)(20720076)「リアリティTV」時代におけるドキュメンタリー表現の変容」(研究代表者)に携わってきた。21世紀現在における「リアリティTV」と称される映像文化の最新動向を軸に、「セルフカメラ」、「モキュメンタリー(擬似ドキュメンタリー)」の手法などに注目することにより、映像表現のみならず、広くドキュメンタリー表現がいかんして変容しつつあるのかを分析・検討し、ドキュメンタリーとは何かを根本的に定義し直すことを目的とする試みである。リアリティを追究するためにノン・フィクションではなく「作り物の世界」の方が虚構との対照を一層浮き彫りにさせる意味においても有効であることの逆説性について考察を重ねてきた。「セルフカメラによるアイデンティティ探求とモキュメンタリーによる虚構の創出」の問題に力点を置き、「リアリティTV」を含む最新のドキュメンタリー表現に注目することにより見えてきた課題は、そもそもの映像文化の発達史の中で、いかにドキュメンタリー表現がジャンルとして形成されていったのか、というジャンルの歴史に対する問い直しの問題である。「ドキュメンタリー(記録)映画の父」と称されるロバート・フラハティ(Robert Flaherty)の代表作『極北のナヌーク(極北の怪異)』(*Nanook of the North*, 1922)は、イヌイットの一家の生活を追ったものであり、家族と共に現地に住み着いて撮影を行う手法をとったことにより、後世のドキュメンタリー作家に多大な影響を及ぼしているが、カメラ撮影のために特別に作られた家で撮影を行うなど、様々に演出がほどこされていたことはあまりにもよく知られている。今日の「メディア・リテラシー」をめぐる議論に

おいても、情報の受け手がいかに受け取った情報を取捨選択していくことができるかという問題に焦点が当てられるが、「本物らしさ」を演出によって追求する映像文化の発達と共に、ドキュメンタリーというジャンルの見方に対する約束事もまた形成されてきたわけである。本研究課題は、最新のドキュメンタリー表現について検討してきた、これまでの研究活動を活かしながら、アメリカ初期映画に遡り、ドキュメンタリーとされるジャンルがいかんして形成・発展されてきたのかを、今日のドキュメンタリー表現に対する接続・連関を意識しながら再検討することを主たる目的とする。

本研究課題はとりわけ初期アメリカ映画におけるドキュメンタリー表現の生成過程に焦点を絞る。映画の黎明期においては現実と虚構の概念が曖昧であり、初期アメリカ映画最大の功績者であるエディソン社制作による作品群からは、リュミエール兄弟同様に「記録映画」の趣き強い作品から、やがてトリック・フィルムと称される手法や、『大列車強盗』(1902)をはじめとする劇映画などが様々に発達していく過程を見ていくことができる。ボディビル、ボクシング、闘鶏、舞踏などを映す「記録映画」としての趣き強いエディソンの初期作品から、後のハリウッド映画のジャンル形成に繋がってくる「西部劇」に代表される劇映画の発達過程を探ることは、すでに映画史研究の主要な課題の一つであり続けているものであり、本研究課題においても同様の過程を踏まえるものであるが、本研究課題の特色として、「アメリカ初期映画におけるドキュメンタリー表現の要素とその可能性」の問題により一層目を向けることにしたい。同時代の時代思潮・光景を映像表現を用いていかに「記録」することができるのか、その手法と作り手の無意識をも含めた欲望の問題を掘り下げて考察してみたい。1893年のシカゴ万博、1900年パリ万博、1904年セントルイス万国博覧会が相次いで開催されているように、世紀転換期は異文化に対する異国情緒としての強い関心が窺えると同時に、ナショナリズム、国家意識に対する意識の高まりも示されていた。この時代の初期映画が「海外・異文化の珍しいもの」として、異文化や異民族の文化風習を記録していること、あるいは、異文化や異民族の「珍しい」文化風習という触れ込みで作られた映画の存在を確認することができる。

具体的にはエディソン社で活躍したエドウィン・S・ポーター(Edwin S. Porter)による、あるアメリカ人観光客の「ヨーロッパ旅行」を描いた『ヨーロッパの休暇』(*European Rest Cure*, 1904)からは、アメリカ人がヨーロッパに対して抱く、「舶来物

としての外国文化／外国イメージ」の様子が端的に図式化されている。ここからはアメリカ人観光客および観光産業への諷刺が見て取れる。すなわち、世紀転換期における異国情緒の関心がいかに映像文化の関心を高め、その発展に不可欠な要素として機能していったのかを探ってみたい。1930年代以降、「人類学映画」、「映像人類学」などと称されるドキュメンタリー映像が隆盛し、初期ドキュメンタリー映画の代表作『極北のナヌーク』（1922）を含めて、珍しい異文化の風習を記録し、伝達する試みに対する関心はドキュメンタリー表現の可能性を飛躍的に推し進めた。また、応募者がこれまでに関与してきた21世紀の「モキュメンタリー表現」の手法から遡って検討するならば、「モンド映画／ショックメンタリー」とも称される海外の、とりわけ「未開」とされる異文化をおもしろおかしく、時に衝撃を伴って紹介するジャンル形成の中で、擬似ドキュメンタリーの手法が発達してきたことをも参照することにより、ドキュメンタリー発達史の黎明期に遡り、異国情緒、ナショナリズム、植民地主義の問題を再検討してみたい。

一方、アメリカ国内に目を向けても、世紀転換期は激変の時代であった。「ニューヨーク23番街で何が起きた」(*What Happened on Twenty-third Street, New York City*, 1901)は、ポーター作品の中でも初期にあたるものであるが、路上に設置した固定カメラは同時代のニューヨークを通り過ぎて行く人々の様子を克明に描き出しており、カメラの存在に気がついてすぐに身を隠そうとする者の姿からは、ハプニング撮影をも想起させる迫真性を演出しえている。また、ラストシーンにて通気孔の上に立ち、スカートが巻き上がることで慌てふためく女性の姿から、後年の観客は、かの有名なマリリン・モンローの『七年目の浮気』(*The Seven Year Itch*, 1955)を想起させられるはずでもあり、物語映画とドキュメンタリー、ハプニング性の狭間であることを目指したであろう、この映画の狙いが実に今日的なものであることにも気づかされる。映画技術を含むテクノロジーの変革期であり、アメリカが国力を増していく只中であり、新旧の価値観が混在する混沌の時代に相当する世紀転換期の中で、20世紀アメリカ大衆文化のエッセンスがどのようにして生成していったのか、アメリカ初期映画から世紀転換期アメリカの姿が浮き上がってくるのではないかと。

当研究の最大の特色として、応募者の専門を活かした、アメリカ研究者による学際研究への志向があり、従来、映画史の観点からのみ捉えられることが多かった初期アメリカ映画を通して、映像が記録しえた、世紀転換

期アメリカの姿を浮かび上げようとする狙いがある。アメリカ研究、映画研究、表象文化研究、比較文化研究はもとより、映像・映画の誕生とその発達史をめぐる研究を通して、ますます映像が多様化する時代に生きる私たちにとって、メディア・リテラシーの問題をも含め、映像と共に生きる意味をも問い直すことができるのではないかと。

3. 研究の方法

世紀転換期のアメリカ文化・社会の文脈から、ドキュメンタリー映像資料を具体的に検討する。エディソン社の実験映像からグリフィス、フラハティの時代までを広く初期映画と捉え、それらの表象を同時代アメリカの文脈から検討する。初期映画をアメリカ文化・社会の文脈から捉え返すことで、1895年という「映画の起源」をも相対化する。初期アメリカ映画に表出されている様々なイデオロギーを分析することにより、世紀転換期アメリカの光景を再構築・再創造する。

初期アメリカ映画にまつわる「リサーチ（フィールドワーク含む）／アーカイブ構築」(Edison Museum やアメリカ議会図書館など)日本および米国での各種学会での研究発表、パネル・セッションの開催(日本映像学会、日本映画学会、日本アメリカ学会、表象文化論学会、Society for Cinema and Media Studies Conference など)学術誌への論文投稿(出版企画立案準備)などを研究期間終了後も継続する。

4. 研究成果

アメリカ初期映画において「ドキュメンタリー」とされるジャンルが、いかにして生成され、記録映画としての存在からニュース映像、そして、「リアリティ」を反映・創出するジャンルとして確立・発展してきたのかを単に映画(史)の表象の問題だけではなく、映像を可能にするテクノロジーの発展、映画・エンターテインメント産業の興業形態と市場、そして社会・歴史・国家状況とのダイナミックな交渉の中から生まれてきたジャンルとして再吟味する。その起源において、カメラの目の前のものを「写し取り」「記録する」という19世紀的な近代リアリズムを引き継いだ反映論的映像観を引きずりつつも、世紀転換期にテクノロジーの発達とともに登場したドキュメンタリー映画は、異文化に対する異国情緒(エキゾチズム)やナショナリズム、国民国家を形成・強化するイデオロギーとも深く結びついていた。

本研究課題は、最新のドキュメンタリー表現研究の動向・理論を検討しながら、こうしたドキュメンタリー映画に関するジャンルの諸問題を、アメリカの初期映画・映像表現

に絞り、歴史化することで、アメリカ初期映画を表象の問題、そしてそれを可能にするテクノロジーの発展、そして映画をとりまく産業形態、そして決して均質ではないオーディエンスの存在をも参照しながら、ドキュメンタリーとされるジャンルがいかにして形成・発展されてきたのかを再検討する試みである。Edward S. Curtis, *In the Land of the Head-Hunters* (1914) から、Robert J. Flaherty, *Nanook of the North* (1922)、*Moana* (1926) に至る、ドキュメンタリー映画ジャンルの黎明期に位置づけられる作品に対し、異国情緒やナショナリズムにまつわる初期アメリカ映画に投影されていたイデオロギーがどのように接続・連関されていったのかを辿ることを目指した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

1. 中垣恒太郎 「ホワイト・マイノリティ」としてのイタリア系アメリカ人表象の変遷」『多民族研究』第7号(2014年3月)116-131頁。

2. 中垣恒太郎 「郊外の未来像 *Do Androids Dream of Electric Sheep?*における消費文化・環境正義」『国際文化表現研究』第9号(2013年5月)107-123頁。

3. 中垣恒太郎 「黒い恋人 多文化主義時代以降の異人種間結婚とマイノリティ共同体における家族・社会観」『多民族研究』第6号(2013年3月)13-27頁。

4. 中垣恒太郎 “Expanding Female Manga Market: Shungiku Uchida and the Emergence of the Autobiographical Essay.” *International Journal of Comic Art*. Vol. 14-2 (2012年) 236-50頁。

5. 中垣恒太郎 「Was Huck Irish? ジョイスのマーク・トウェイン/トウェインのアイリッシュ」『JOYCEAN JAPAN』(日本ジェイムズ・ジョイス協会)第23号(2012年6月)71-85頁。

6. 中垣恒太郎 「マーク・トウェインの自己形成とナショナル・アイデンティティ」『マーク・トウェイン 研究と批評』第10号(2011年5月)32-36頁。

7. 中垣恒太郎 “The Ghosts of Tom Joad: Reading Works of Steinbeck during the Great Depression.” *Steinbeck Studies* 34 (2011年5月)49-54頁。

[学会発表](計34件)

1. 中垣恒太郎 “How Can Documentary Filmmakers Face Natural Disasters?

Representations of 311 and Japanese Filmmakers’ Challenges.” 2014年4月19日(於・米国シカゴ・マリOTTホテル)ポピュラー・カルチャー学会(Popular Culture Association)

2. 中垣恒太郎 “Gender Politics and Body Transformation: The Works of Shungiku Uchida and the “Shrinking” Theme.” 2014年3月23日(於・香港大学アートセンター)Modern Women and their Comics: Changing Local Identities from the 1960s to 2000s.

3. 中垣恒太郎 「ペーパーバック・リーディングの導入 『ティーン向け小説』を素材にした教育実践とその可能性について」2014年3月9日(於・早稲田大学)言語教育エキスポ2014。

4. 中垣恒太郎 「アメリカ大衆文化における『ホーボー』イメージの想像力」2013年11月2日(於・日本女子大学)日本英文学会第8回関東支部大会英米文学部門シンポジウム「workと20世紀転換期の英米文学」。

5. 中垣恒太郎 “Mark Twain and His Irish Connection: A Multi-Ethnic American Cultural Identity.” 2013年8月3日(於・米国エルマイラ大学マーク・トウェイン・センター)第7回マーク・トウェイン国際会議。

6. 中垣恒太郎 「『ホワイト・マイノリティ』としてのアイルランド/イタリア系アメリカ文化 内なるナショナル/エスニック・アイデンティティと移民の夢」2013年7月27日(於・国土館大学)多民族研究学会第20回全国大会。

7. 中垣恒太郎 「テクノロジー・カメラ・アメリカ・文明批評」2013年7月21日(於・広島アステールプラザ)日本SF大会「視覚映像文化とSF」。

8. 中垣恒太郎 「3.11『あの日』からの物語文化 『故郷/記憶/風景/表現』をめぐる対話」2013年7月14日(於・東京経済大学)Cultural Typhoon学会。

9. 中垣恒太郎 “Reexamining the Post-Apocalyptic: Imagination of Sci-Fi Manga.” 2013年7月13日(於・東京経済大学)Cultural Typhoon学会。

10. 中垣恒太郎 「アニメ研究/教育」に文学批評理論を援用する可能性について」2013年6月16日(於・日本大学芸術学部)第15回日本アニメーション学会全国大会。

11. 中垣恒太郎 「エッサネイ期(1915-16)のチャップリン 「放浪者」像の生成とアメリカ文化」2013年6月2日(於・東京造形大学)第39回日本映像学会。

12. 中垣恒太郎 “Imagining the American Eden: Searching for the Origins of America and Americans.” 2013年5月2日(米国カリフォルニア州立大学サンノゼ

校) “Steinbeck and the Politics of Crisis: Ethics, Society, and Ecology.”

13. 中垣恒太郎 “The Development of Alternative Japanese Women’s Manga Genre: Shungiku Uchida and the Manga Cultural Markets in the 1980’s.” 2013年1月24日(オーストラリア、シドニー大学) “Women’s Manga in Asia: Glocalizing Different Cultures and Identities.” Conference: The Graphic Novel.

14. 中垣恒太郎 “Reading / Teaching / Self-Expression of Manga in the United States: Manga as Children’s Literature and Methods of Cross-Cultural Communication.” 2012年11月24日(於・大東文化大学) 日本イギリス児童文学会第42回全国大会。第1回国際シンポジウム “Research in Children Literature from Asian Perspectives.”

15. 中垣恒太郎 “The Atomic Holocaust in the Perspectives of Shōjo: From Sirato Sanpei’s *A Vanishing Girl* to Kōno Fumiyo’s *At the Corner of This World*.” 2012年9月9日(英国オックスフォード大学マンスフィールド校) 1st Global Conference: The Graphic Novel.

16. 中垣恒太郎 「災害 SF 映画の系譜 アメリカ・終末思想・都市文明論」2012年8月8日(於・松山大学) 第25回エコクリティシズム研究会全国大会シンポジウム「災害・メディア・文学」。

17. 中垣恒太郎 「Italian Hours 『大理石の牧神』における近代・国家・ツーリズム」2012年7月21日(於・専修大学) 日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部例会。

18. 中垣恒太郎 「瀬戸内文化圏をめぐる物語の現在」2012年7月14日(於・広島女学院大学) Cultural Typhoon 2012 広島。

19. 中垣恒太郎 「Manga メディアの浸透と文化変容 グローバリゼーション時代における異文化交流の可能性」2012年6月16日(於・鶴見大学) 鶴見大学創設50周年記念国際シンポジウム「Mangaとグローバル文化」。

20. 中垣恒太郎 「アメリカン・エデンの想像力 中世趣味・聖地巡礼・ルーツの旅」シンポジウム「『エデンの東』の多重空間を読み解く」2012年5月28日(於・大東文化大学) 日本ジョン・スタインベック協会第36回全国大会。

21. 中垣恒太郎 「Mark Twain on the Move 19世紀アメリカ文化における移動・交通・巡礼」 「アメリカ文学における『ロード』の物語学」2012年3月28日(於・日本女子大学) 日本女子大学文学部学術交流企画公開ワークショップ。

22. 中垣恒太郎 “Shojo Manga and Women

Manga.” 2012年3月25日(ベトナム、ハノイ、日本文化交流センター) Women and Manga Conference.

23. 中垣恒太郎 “*Eden of the East* as New Dimension after the “Sekai-kei” Genre: Socio-Cultural Issues, Media Franchise Strategy the Images of America.” 2012年3月16日(カナダ、トロントマリOTTホテル) Association for Asian Studies.

24. 中垣恒太郎 「ゴールデン・エイジ期(1939-56)『バットマン』におけるアメリカ文化と時代思潮」2011年11月26日(於・京都国際マンガミュージアム) 京都精華大学国際マンガ研究センター・バットマン研究会。

25. 中垣恒太郎 「児童文学文化としての米国コミック事情」2011年11月19日(於・中京大学) 日本イギリス児童文学会第41回研究大会。

26. 中垣恒太郎 「米国グラフィック・ノヴェルにおける女性自伝文学の潮流」2011年9月10日(於・大東文化会館) 英米文化学会第29回全国大会。

27. 中垣恒太郎 「災害文学の想像力 都市・自然・環境・テクノロジーの政治学」2011年8月27日(於・明治大学生田校舎) 第17回 ASLE(文学・環境学会) 全国大会。

28. 中垣恒太郎 “Mark Twain and National Identity” 2011年8月13日(於・米国ハンニバル・マーク・トウェイン・ミュージアム) Mark Twain Boyhood Home Museums International Conference: Mark Twain’s Hannibal: The Clemens Conference.

29. 中垣恒太郎 “Innovations of the Post-Documentary Style in the Works of Shoji Kokami’s Fictional Theater: The Meeting of Documentary and Japanese Drama in the Era of the Internet Community and Global Culture” 2011年8月9日(於・大阪大学) International federation for Theatre Research Osaka 2011: Tradition, Innovation, Community.

30. 中垣恒太郎 “The Atomic Holocaust in the Perspectives of Shōjo: From Sirato Sanpei’s *A Vanishing Girl* to Kōno Fumiyo’s *At the Corner of This World*” 2011年7月22日(於・米国サンディエゴ・コンベンションセンター) 2011 Comic Arts Conference.

31. 中垣恒太郎 「黒い恋人 多文化主義時代以降の異人種間結婚とマイノリティ共同体における家族・社会観」シンポジウム「ハリウッド映画は異人種間結婚をどう描いてきたか」2011年7月16日(於・国土館大学) 第16回多民族学会全国大会。

32. 中垣恒太郎 「Was Huck Irish? ジョイスのマーク・トウェイン/トウェインのアイリッシュ」シンポジウム「To the West! ジ

ヨイスとアメリカ」2011年6月18日(於・京都ノートルダム女子大学)第23回ジェイムズ・ジョイス協会。

33. 中垣恒太郎「(プロト)ドキュメンタリーの政治学 アメリカ初期映画における歴史・テクノロジー・ナショナリズム」2011年5月29日(於・北海道大学)第37回日本映像学会全国大会。

34. 中垣恒太郎“Enlarging Women Manga Markets: Family Issues and the Autobiographical Tradition / Innovation of Japanese Women Manga Artists”2011年4月2日(於・米国ハワイ・コンベンションセンター)2011 Association for Asian Studies Conference.

〔図書〕(計13件)

1. 中垣恒太郎(分担執筆)「テレビ文化批評としての映画『トゥルーマン・ショー』

「リアリティTV」・消費文化・一九五〇年代アメリカ」塚田幸光編『映画・メディア・テクノロジー』(ミネルヴァ書房、2014年6月)印刷中。

2. 中垣恒太郎(共編著)「アメリカ大衆文化におけるアジア系表象の新潮流 マイノリティ・ステレオタイプの反転」『憑依する過去 アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』小林富久子監修・石原剛・稲木妙子・原恵理子・麻生享志・中垣恒太郎編(金星堂、2014年3月)116-182頁。

3. 中垣恒太郎(分担執筆)“The Atomic Holocaust from the Perspective of *Shōjo*: From Sanpei Shirato's *A Vanishing Girl* to Fumiyo Kōno's *In a Corner of This World*.” *Cultural Excavation and Formal Expression in the Graphic Novel*. Eds. Jonathan C. Evans and Thomas Giddens. Inter-Disciplinary Press (2013年7月)117-125。

4. 中垣恒太郎(分担執筆)「瀬戸内から世界へ 「ローカリティ/ジェンダー/ことば」をめぐる地方文化の現在」上村崇・高雄きくえ編『言葉が生まれる、言葉を生むカルチュラル・スタディーズ2012 in 広島 ジェンダー・フェミニズム篇』(ひろしま女性学研究所、2013年6月)156-171頁。

5. 中垣恒太郎「天国への階段 マーク・トウェイン晩年の動物観・宗教観・宇宙観」『神の残した黒い穴を見つめて アメリカ文学を読み解く 須山静夫先生追悼論集』(音羽書房鶴見書店、2013年5月)212-234頁。

6. 中垣恒太郎(分担執筆)「文学理論 アニメ研究における批評理論の可能性」小山昌宏・須川亜紀子編、『アニメ研究入門 アニメを究める九つのツボ』(現代書館、2013

年3月)16-46頁。

7. 中垣恒太郎(分担執筆)「マンガ 規制の歴史と多様化」「アニメーション グローバル化・無国籍化へ」白井澄子・笹田裕子編『英米児童文化55のキーワード』(ミネルヴァ書房、2013年3月)176-183頁。

8. 中垣恒太郎(分担執筆・編集委員)「旅行文学としての『コンコードとメリマック川の一週間』」日本ソロー学会編『ソローとアメリカ精神 米文学の源流を求めて』(金星堂、2012年10月)30-44頁。

9. 中垣恒太郎(編集委員)『ヘミングウェイ大事典』島村法夫・今村楯夫監修(勉誠出版、2012年7月)956頁。

10. 中垣恒太郎(分担執筆)「マーク・トウェインと降霊術 『アメリカの爵位権主張者』と「霊の肉体化」計画」松本昇・東雄一郎・西原克政編『亡霊のアメリカ文学 豊穡なる空間』(国文社、2012年8月)81-96頁。

11. 中垣恒太郎(分担執筆)「アメリカ文明論としての『モダン・タイムス』 大量消費文化の台頭と世界不況下の格差社会」新英米文学会編『英米文学を読み継ぐ 歴史・階級・ジェンダー・エスニシティの視点から』(開文社出版、2012年3月)345-373頁。

12. 中垣恒太郎(単著)『マーク・トウェインと近代国家アメリカ』(音羽書房鶴見書店、2012年2月)414頁。

13. 中垣恒太郎(分担執筆)伊藤詔子監修『オルタナティブ・ヴォイスを聴く エスニシティとジェンダーで読む現代英語環境文学103選』(音羽書房鶴見書店、2011年7月)392頁(6項目を執筆担当)。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中垣 恒太郎(大東文化大学・経済学部・准教授)

研究者番号: 80350396